

山 梶 子 談 議

正 員 柳 沢 米 吉*

1月31日私は海上保安庁長官という職を辞した。そして官吏の生活を後にしたときいわゆる感無量という感じを胸一杯に感じた。25年の生活は長いようでやはりあつという間であつた。あつという間に過したこの半生のうち、胸に残る陰は言いたいことを言い、やりたいことをやつてきた自分の我儘、我執がやはり気になることだ。この私の性格のため、どれだけ多くの人気が心を悪くし、また傷ついてもいることか、思うだけ嫌な気持ちになる。「人間は過誤の動物である」と割切つてしまえばそれまでだが、少なくとも科学の道を歩む一技術者としては理屈に合わない恥かしいことだと思う。ことに自ら自己の頭の力の限界を見出し、大自然の前に愚かな赤裸々の自分を投出し、そしてただ大自然の直接の啓示を得んものと、進んで土木の道を選んだ自分に見れば、ひとしほその罪の深さを思い知る。25年前空つ風吹き荒ぶ上洲を出て、無限に続く紺碧の海原を友とする港湾技術屋として第一歩を踏み出した当初は、私の望んだ自然の神秘の扉はすぐ開くがごとくに見えた。そして自然の支配すらできるのだと思つたりした。いまにして思えば、その頃の私は富士の裾野に立つて富士を理解したと同じだつたのかも知れない。それをはずきり知つたのは大陸での生活だつた。海河の塘沽築港、茫洋として数千年数万年の歴

史をいやというほど身にしみて感じさせる大陸の自然人……。私はただ我武者羅に仕事に取つくほかなかつた。なるほど、飛びつけばつかまらしてはくれる。しかしそれでびくとも動いてはくれない。自然の際限のない奥行というか、無情さでもいうのであろうか。しかし私は涙を流して喜んだ。私はこの時こそ始めて土木技術者としての生甲斐を感じたからだ。そして私が身につけている技術がいわゆる秀才の技術であり、Willkürの技術に過ぎないことを知り得たからだ。私の技術に対する自らの背信はまもなく始まつた。私の眼前に現われた自然の機会が別なものであつたなら、あれほどの我儘気儘はあるいはもつと違つた形で表われたのかも知れない。しかし、所詮どんな道を歩んでも万物を生む自然はまたむごい母であることを知つている。私がどんな成行に身をまかせても自然は私を相手にはしてくれないだろう。それを思うからこそ押通した自分の我儘と我執が気になつてくるのだ。私は山村の生家に帰つて庭の山梶子の花を眺め、ひそかに自らの号とした。そしてこの花のように私の第二の人生が楚々としてしかも真実でつつまれてるように自ら念じたのである。またそうすることが、私を育ててくれた港湾いな日本の土木技術に対して何かいいことをしたように思えたからである。

UDC 628:061.22(73)

米国工学百年祭、衛生工学部会報告

正 員 工学博士 岩 井 重 久**

1. ま え が き

昭和26年6月以来、衛生工学研究のため米国に出張中、昭和27年春、滞在地 Cambridge, Mass. において大西会長(当時)より、9月上旬に Chicago で開かれる米国工学百年祭に、わが学会代表の一員として出席するよう、依頼状を受取つた。早速その準備委員

会とも連絡をとり、滞米を延期して帰国の途次列席することにした。

Chicago では福田武雄教授を始め、伊藤、村、清野の諸氏や国鉄の江藤局長、齋藤氏とも落合い、ともにこの祝典に列し、講演その他種々の行事に参加したのは喜びにたえない。米学会に対するわが学会からの善意がこうして伝えられたと同時に、諸外国よりの多数参加者ともこよなき親ほくが随所に交歓されたのは

* 前海上保安庁長官

** 京都大学教授、工学部土木工学教室

言うまでもない。滞米生活の終止符としてこうした機会に恵まれたことは、私にとつても望外の幸いであつた。

この百年祭の全般、または各部会については、福田教授その他参列の各氏から報告があると思うので、以下には私が主として出席した衛生工学会につき2,3を報告し、所感を述べるにとどめよう。

2. 衛生工学会報告

9月8,9の両日にわたり、米国土木学会の衛生工学会が米国公衆衛生学会(APHA)の工学会(Eng. Sect.)と共催したプログラムは次のようである。

(1)本部会(ASCE)の歴史(1923~52)。(2)衛生工学史(1852—1952)。(3)London 給水事情。(4)衛生工学の進歩に関する連合委員会報告。(5)廃物収集の近似解析法。(6)討議会——衛生工学における顕著な業績について(給水と浄水処理、河水汚濁、下水処理、産業廃水、官庁による衛生工学事業、顧問衛生技術、中南米の衛生)。(7)下水道および下水処理委員会報告。(8)衛生工学の実際上の重要性について;(a)保健、福祉および経済上の発展、(b)因習(深く根ざしている習慣)打破の必要性、(c)衛生工学の将来の発展、(d)行政(有効な実地適用のための要項)。(9)放射能——その一般重要度と水道管理における追跡探知。(10)ばく気および活性汚泥法における改良。(11)衛生工学概観。

かかる催しの常として、過去の回顧、現状の批判とともに未来の抱負を論ずるような議題が主となるのは当然である。過半数を占めるこうした講演討論の要旨をまとめると次のようである。

元来 Civil Engineer とは、技術をもつて社会に奉仕する者として Military Engineer と区別され、1760年に英国で称えられたしたのである。その後文明の進歩は科学技術の分岐を促し、勢い種々の専門技術者を生むにいたつた。しかし自分の専門以外に広く他部門をも見わたし、常に本来の理念を実現すべく努力する技術者が要請される。Civil Engineer はこうした伝統のもとに、全技術者の母体としての唯一の使命をはたしてきたのである。この催し自体が ASCE 百周年をもつて開かれ、しかも他学会の協賛をえて盛大に祝われるゆえんもここにある。

衛生工学は、土木工学に属する1部門として、まず国土産業開発のための上下水道の計画、設計から出発

し、集団予防による公衆衛生の改良が本来の社会奉仕理念と全く合致することを意識しつつ、化学、生物、細菌学および医学的知識をも取入れ、上下水処理はむろん、汚廃物処分、公水汚濁防止、産業給廃水、そ族こん虫駆除、食品空気、その他環境および産業衛生の全般にわたつて発達をとげ、さらに放射性物質による汚染の除去や同位元素による浄化機構の究明など、近代原子物理学の範囲にまで拡張されつつある。

すなわち、こうした活動は、今世期始めまでの疫感に対処すべき方便化時代から、その後約30年間の方式化時代を経て、第2次大戦をけい機として、社会化あるいは人類愛化の時代に入つてきた。はなはだ多岐にわたる諸分野の新総合科学技術たる衛生工学には、学者技術者をたえず養成激励してその各分野に新境地を開拓するはむろん、他部門との緊密な協力態勢を保持し、特にその行政適用実施、一般民衆啓もうに当つてはいままでの成果をさらに向上すべく努力を重ねねばならない。この衛生工学会は ASCE で第4番目の部会として1923年に設けられ、以来、毎年会合を重ね、小委員会による調査研究、報告出版、教育訓練、他の学、部会との連絡など、目ざましい活躍ぶりを見せている。

残余の演題に触れると、(2)は唯一の外国事情の紹介として、また、(5)は統計解析による汚廃物収集作業の合理化、(7)、(10)は下水処理に関する動向と新技術、(9)はざん新な radiological の研究、を述べている点で各大いに参考となつた。なお11日には Health and Human Engineering と題する討議会で6つの議題がかけられたが、その詳細はここでは省く。

3. むすび

以上、米国が諸外国から吸収した知識に基づいて創始し、しかも比較的歴史の浅いこの部門について、その人類福祉に対する意義を再確認し、はてしない科学の進歩に挑む、と言う真しな態度にわれわれは好感をおぼえ、ともすれば抱きながちな「米國物質文化の展示会」的気分から脱却することができた。

今後、われわれは国情に即した衛生工学を樹立していかねばならないが、本文により会員諸氏がこの分野に幾分でも興味を持たれ、わが学会にもこうした部会設立の機運が生れることを切に希望したい。